



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第51号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Description	事務局：北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2014-04-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73604
Type	journal
File Information	DRFmonthly_51.pdf



月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第51号

No.51 April, 2014

【特集】SPARC 2014 Open Access Meeting
参加レポート

【連載】かたつむりとオープンアクセスの日常



SPARC 2014 Open Access Meeting 参加レポート



2014年3月3～4日にかけてアメリカのカンザスシティにて開催された"SPARC 2014 Open Access Meeting"に参加する機会を頂きました。会議の様子をご報告します。



<http://sparc.arl.org/events/OA14>

レポート：西薊由依（鹿児島大学）

SPARC Open Access Meetingとは

SPARCが開催するこの会議は、2010年までは"SPARC Digital Repositories Meeting"という名称でしたが、2012年から"SPARC Open Access meeting"としてリポジトリだけでなく様々なオープンアクセス（OA）運動について議論する場となりました^[1]。会議は隔年開催で、今回は前回（2012年）以降の2年間におけるOAの展開や最新動向、今後の展望について話し合わせ、北米を中心に約240名の参加がありました。

会議概要

SPARCは従来、学術雑誌論文のOAに取り組んできましたが、よりよい学術コミュニケーションのためにあらゆる種類の研究成果のOAに関心が高まっている昨今の状況を反映させ、発展的戦略として、学術雑誌論文のOA、オープンデータ、オープン教育リソース（OER）、の3つの課題に取り組んでいくことを表明しています^[2]。今回の会議のテーマは"Convergence"とされ、これら3つは接点を持っており集約していくことが重要であるとの認識を示しています^[3]。プログラムは、基調講演とテーマ別4セッション（シングルセッション）、ポスター発表（"Innovation Fair"）から成っており、ベンダーによる展示もありました。いくつかピックアップしてご紹介します。

科学の民主化

基調講演者はNIHのデータ部門責任者ボーン氏（Dr. Philip E. Bourne）。オープン化は科学の民主化につながるとし、データの精査が可能となるメリットや、被引用数だけでない新たな報奨の仕組みや、研究に関わる者すべてを同等に評価することの必要性などを主張しました。そして、この変化は研究ライフサイクル、ひいては学術コミュニケーションに影響を与えるだろうと述べました。

OA促進の担い手

アドボカシーとポリシーについてのセッションでは、研究助成団体や欧州委員会（EC）のOA方針の紹介があったほか、SPARCの学生アドボカシー責任者ショッキー氏（Nick Shockey）はOA推進のためには学生が重要な役割を果たすと主張しました。学生の権利として必要な研究成果へのアクセスを求めるOA運動"Right to Research Coalition (R2RC)"（2009年～）^[4]や、学生発案のOpen Access Button^[5]などを紹介しながら、新しいシステムのデザインには学生を関与させるべきだと述べました。そして、この学生とOAとのかかわりで高い関心を持たれているのが、オープン教育リソース（OER）、とりわけオープンテキストです。



OER

会議ではオープンテキストに関わる講演が複数ありました。関心の高さの背景としては、米国では2003年から2013年にかけてテキストの価格が82%上昇し^[6]、65%の学生が価格の高さを理由にテキストを購入しないとの調査結果^[7]もあるなど、学生のパフォーマンスが悪化していることが挙げられます。

Open Academics Textbook Initiativeのエグゼクティブ・ディレクターであるエルンスト氏 (Dave Ernst) は、オープンテキストは、コストや情報へのアクセス、将来的な持続可能性の面から、機関・学生・教員すべてにとってメリットがあり、進めていく必要があると述べるとともに、普及させていくためには、前述のテキストの価格問題やオープンであることについて教員の理解を深めること、また、プラットフォームを用意したり、質に対する懸念に対してはピアレビューのシステムを導入するなど、教員のニーズを把握しそれに応えることが必要だと述べました。さらに、ワシントン州コミュニティ・テクニカルカレッジ委員会のブルトン氏 (Connie Broughton) からは、調査の結果、教員がOERについての情報を欲していることや、OERイニシアティブへの関与を望んでおり、機関や部局からの支援を求めていることが判明した、との紹介もありました。



4Rs/5Rs

OERについてさらに触れるべきことは、再利用についてです。

アドボカシーとポリシーについてのセッションにおいて、Creative Commonsのパブリックポリシー責任者であるヴォルマー氏 (Timothy Vollmer) からは、OERでは、4つのRのポリシー—Reuse (再利用), Redistribute (再配布), Revise (改訂), Remix (再編集)—が重要であるとの紹介がありました。同氏は、BOAI10ではライセンスや再利用について言及されているが、論文のOAに関する公的なポリシーではそれらがカバーされているとは言えず、OAは、OERのポリシーを参考にとよいのではないかと提言していました。

さらに、この4つのRにもう1つのRを足すべきだと主張したのは、Lumen Learningのワイリー氏 (David Wiley) です。一時的なアクセス権の確保でなく、永続的に所有 (Retain) できるようにしていくべきだと述べていました。



OAはもう特別なものではない

PLOSのアドボカシー責任者であるナイロン氏 (Cameron Neylon) は、研究助成団体のOAポリシーを背景にOA出版 (≒APC取引) が増加を続けていると述べた上で、著者よりもむしろ機関がOAポリシー遵守の鍵を握っていること、機関はコンテンツではなくサービスを購入するようになってきていること、しかし各機関が自機関の出版やリポジトリ登録の情報、支払の情報をきちんと把握できているか疑問であることを指摘しました。OA出版の規模の拡大にともない、効率的な管理が重要であり、各機関や出版社がばらばらのシステムを使うのではなく、識別子や転送プロトコル等を利用して共通のインフラを構築し、データの共有を行っていくべきだ、と主張していました。

また、ポートランド州立大学のライブラリアンであるエメリー氏 (Jill Emery) は、OAは、無料ではなくコストがかかるものである／管理が必要なものである／副次的あるいは特殊なものなどではなく事業である、と定義付けた上で、図書館全体でOAに取り組んでいく必要性について主張しました。例えば、受入/ILL担当部署では、ローカル目録へのOAコンテンツの追加や、APC管理を担当する、目録担当部署では、ORCIDを取入れたり、DOIの付与を行う、収書担当部署では、適切なOAの選別や、OAに対応した割引交渉に取り組む、といったように、従来の各図書館業務で培ってきたスキルをOAに対応するために適用させるべきだと述べました。そして、セクショナリズムを打破し、既存のスキルを活用し、全員が関与した時、最高の状態のアドボカシーが起こる、と訴えていました。



最後に

エルンスト氏から、オープンテキストがただ存在するからといって教員がそれを採用するわけではない、彼らは費用対効果を分析している、といった趣旨の発言があったのですが、(テキストに限らず) オープン化を進めていくことが、各ステークホルダーにとってどのようなコストとメリットをもたらすかを分析し、メリットを増やしていくための具体的な対応を取っていくことが必要だとあらためて感じました。

最後にこの場をお借りして、今回の会議に参加する機会を与えてくださった機関リポジトリ推進委員会及び国立情報学研究所のみなさまに心より御礼申し上げます。



- [1] <http://www.sparc.arl.org/news-media/news/11-07-26>
- [2] <http://www.sparc.arl.org/issues>
- [3] <http://www.sparc.arl.org/sparc-pleased-announce-2014-open-access-meeting-theme-will-be-convergence>
- [4] <http://www.righttoresearch.org/>
- [5] <https://www.openaccessbutton.org/>
- [6] Bureau of Labor Statistics. 2014. Consumer Price Index Databases. <http://www.bls.gov/cpi/data.htm>
- [7] U.S. PIRG Education Fund and the Student PIRGs. 2014. Fixing the Broken Textbook Market. <http://www.studentpirgs.org/reports/sp/fixing-broken-textbook-market>



かたつむりと オープンアクセスの日常



第6回

ロボットが博士号を取る日...あるいは、既にもう？ *Can SCIGen get a Ph.D? Or has it?*

STAP細胞と理化学研究所の小保方晴子さんをめぐるニュースが連日、メディアを賑わせています。不正行為の全容は調査中ですが、小保方さんが早稲田大学に提出していた博士論文の中身の大部分も他所から無断転載したものの切り貼りらしいと報じられており、事態は日本の学位審査への不信にもつながる様相を見せています。

このニュースを聞いて自分が真っ先に思っていたのは、「これならもしかすると機械的に生成した論文でも学位審査を通せるのではないか?」ということでした。コンピュータ科学分野にはSCIGen^[1]という、文法的には問題がなく、使われている単語もそれっぽいものの、中身はまったくちんぷんかんぷんな「論文っぽいもの」を自動生成するソフトウェアがあります。一定量のそれらしい文章があれば審査を通るのならば、SCIGen同様の手法で学位審査をパスできるのではないかと。NIIは「ロボットは東大に入れるか」という、人工知能に入試問題を解かせるプロジェクトを行っていますが、もし

かすれば東大入試を突破するより先にロボットが博士号を取得する未来すらありえるかも知れない。そんな冗談まで思い浮かびます。

しかし、もしかするとこれは冗談で済まないかも知れません。それも未来ではなく、現在まさに起こっている可能性もあります。機械生成論文は、学術の世界に予想以上に侵入しているようなのです。

2014年2月、Nature NewsにSpringerとIEEEの商用プラットフォームから、あわせて120本以上の「ちんぷんかんぷんな」論文が削除された、という記事が掲載されました^[2]。これらの論文はフランスのコンピュータ科学者、Cyril Labbé氏によって発見されたものでした。Labbé氏はSCIGenで生成された論文を発見する技術を開発しており、その技術によって今回の論文群を発見したとのことでした。これらのSCIGen生成論文は、「査読を行う」と明記している国際会議のチェックをかいくなり、有料データベースに収録されるような会議プロシーディングの中にまで入り込んでいました。

SCIgenで作った論文が通過してしまうような、ずさんな査読しかやっていないところがあるというのは、2009年にOA雑誌に機械生成した論文を送ったP. Davis氏の実験でも既に知られていました^{[3][4]}。そもそもSCIgen自体、同じようにずさんなチェックしかしていない国際会議にいたずらをしかける目的でMITの学生ら

(当時)が開発したもので、でたらめな論文を送りつける、というのはずさんな査読体制(というか、査読があると言っているが実はやっていないこと)を告発するための常套手段です。機械生成したものではありませんが、Science誌が2013年に、同様のでたらめ論文をOA雑誌に送りつける実験を行っていた(そして半数以上が採録された)ことも記憶に新しいでしょう^[5]。

今回発覚した事件がこれらの先行事例と異なるのは、「でたらめな論文が載った」と告発したのは、投稿者ではなく第三者であったことです。Labbé氏の調査がなければ、機械生成論文は今もそれらの著者による学術論文としてデータベース等に掲載され続けていたでしょう。もしかすると、業績数にカウントされることもあったかも知れません。ずさんな査読しかないような国際会議に論文を出しても大した業績とは認められないかもしれませんが、ないよりはあった方が良いでしょうし、とにかく何か業績がいるというときにはずさんであっても、いやずさんな査読しかないからこそ(どんな適当でも載るからこそ)、研究者に重宝される場面があるとも考えられます。どうせ適当な論文でいいなら、機械生成で楽をしようというという者も出てくるでしょう。最近ではずさんな査読と言えば、コストをかけずに掲載料収入を得ることを目的とする「ハゲタカOA出版社」のイメージが強く、研究者は「食べ物にされる側」という印象もありました。しかし今回の件は、研究者の側にもハゲタカに食べ物にされるというよりは、そのずさんさの恩恵に預かり手軽に業績を増やす、共犯者がいる可能性を示唆しています。

もっとも、以上はあくまで推測の話。実際の機械生成論文の投稿意図は不明です。機械生成論文の著者として名前をあげられた人も「身に覚えがない」としており、単なるイタズラの可能性もあれば、主催者側がそれらしい投稿数が

あったように見せかけるために、機械生成論文で水増しした可能性もありえます。ただいずれにしても機械生成論文を素通りさせるずさんな査読があること、それを素通りした論文が学術情報流通の世界に中に入ってきてしまっていることは確かです。

学位審査も同僚による研究内容の審査という点では一種の査読と言えますが、冒頭の事件を思えば、そこでもまた「ずさんな査読」が行われていることが危惧されます。Labbé氏はSCIgen生成論文を判定するためのツールも無料公開していますが^[6]、いずれこの判定にひっかかる「博士論文」が見つからないとも限りません。もしかすると、ロボットは既に博士号を持っているかも知れないのです。

- [1] <http://pdos.csail.mit.edu/scigen/>
- [2] <http://www.nature.com/news/publishers-withdraw-more-than-120-gibberish-papers-1.14763>
- [3] <http://scholarlykitchen.sspnet.org/2009/06/10/nonsense-for-dollars/>
- [4] <http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/20090613/1244915185>
- [5] <http://www.sciencemag.org/content/342/6154/60.full>
- [6] <http://scigendetection.imag.fr/main.php>



佐藤 翔

同志社大学社会学部教育文化学科助教。
ブログ「かたつむりは電子図書館の夢をみるか」
(<http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/>) 管理人。